

ブナオ山観察舎における哺乳類および大型猛禽類の観察記録 (1) 2024—2025

八 神 徳 彦・中 田 勝 之・後 藤 理 子

石川県白山自然保護センター

Observation Records of Mammals and Large birds of Prey at Bunao Mountain Observatory (1) 2024—2025

Tokuhiko YAGAMI, Katsuyuki NAKATA, Riko GOTO

Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa

白山自然保護センターブナオ山観察舎において、2024年11月から2025年5月までの開館期間中に観察された動物の出現状況などについてとりまとめた。対象としたのは、ニホンカモシカ、イノシシ、ニホンジカ、ツキノワグマ、ニホンザルの哺乳類と、イヌワシ、クマタカの大型猛禽類である。ニホンカモシカ、ニホンザルは期間を通して観察され、イノシシは厳冬期に多いが次第に減少し、ニホンジカは厳冬期に姿を消した。ツキノワグマは11月末には冬ごもりし、4月になると雪解け斜面に芽吹く草を食べに集まってくると思われた。大型猛禽類の個体数は少なくとも、イヌワシ成鳥3羽、若鳥1羽が、クマタカ3羽が観察された。

はじめに

ブナオ山観察舎は、石川県白山自然保護センターの附属施設で、白山麓の野生動物を観察するために1981年に開設された。ブナオ山は標高1,365mで尾添川右岸に位置し、ブナオ山観察舎は尾添川を挟む形でその向かいの標高600mにある。観察舎周辺は白山一里野県立自然公園区域であり、ブナオ山の大部分は白山国立公園区域になっている。観察舎からは主にブナオ山南斜面に現れる動物が観察でき、開館期間は動物が観察しやすい落葉期や積雪期となる通常11月20日から翌年5月5日の午前10時から午後4時までとなっている。年末年始を除き毎日開館しており、開館中は原則として職員2名が施設の維持管理や、動物の観察のサポートを行っている。観察された動物等は業務日誌に種類、頭数、位置、出現時間などが記録されている。そこで、昨シーズンの業務日誌をとりまとめ記載する。

方法

1. 観察地の概要と調査方法

通常の観察地は、尾添川右岸の川岸（標高約500m）からブナオ山山頂付近の南斜面の約8haである（図1）が、条件の良い時は、ハライ谷の右岸斜面、尾添川上流右岸斜面なども観察された。観察は双眼鏡やフィールドスコープなどで行い、動物を最初に発見した時間、頭数と場所を概略図に記載した。動物が移動して別のところで再発見された場合、再発見と判断できる場合は記録しなかった。主に観察した動物は、ニホンカモシカ *Capricornis crispus*（以下カモシカ）、ニホンジカ *Cervus nippon*（以下シカ）、ツキノワグマ *Ursus thibetanus*（以下クマ）、イノシシ *Sus scrofa*、ニホンザル *Macaca fuscata*（以下サル）、イヌワシ *Aquila chrysaetos*、クマタカ *Nisaetus nipalensis* である。また、観察舎近くの定点で積雪深を毎日9時頃観測した。年末年始の他、1月9日、2

月3日から9日、2月19日から24日は、停電や大雪のため臨時閉館としたため、観察したのは148日であった。

図1 主な観察地の範囲



結果

観察地の状況

観察地であるブナオ山斜面では、11月22日頃は紅葉が終盤であったが、地表面はまだ緑の草本が多かった。11月28日にはブナオ山の上で冠雪があり、樹木の落葉が急激に進んだ。観察舎では11月29日に2cmの積雪があり、12月10日から徐々に積雪が増え、12月18日頃には観察地では雪崩も発生し、雪崩跡地には土が出ているところもあった。その後1月4日で積雪は128cm、2月1日で230cmとなり、2月4日から9日には大雪となり、2月11日には最深積雪深350cmを記録した。2月16日にはオオノマで大規模な雪崩が発生した。2月19日から24日も大雪となり、3月1日には積雪300cmとなった。3月になると雪崩や落雪をくり返し、雪崩斜面や岩場、沢筋の斜面などでは土が広く出てきた。例年より残雪が多く雪解けが遅かった。4月1日で積雪170cmとなり、4月15日頃には早くから土の出ている所は草が芽吹きだした。4月19日頃にはヤマザクラが開花し、ブナなどの芽吹きが見られ、早いところではアザミなど高茎草本が展葉し始めた。4月29日は積雪0cmとなり、5月に入ると樹木の展葉が急激に進み動物を観察しにくくなった(図2)。

ニホンカモシカ

【出現状況】(図3)

カモシカはシーズンを通して見られ、観察日148

日のうち観察できたのは135日であった。観察されたのは399回、延べ434頭で、内訳は単独が363回、2頭が33回、3頭が2回で、単独はすべて成獣、2頭は親仔が16回、雄雌のペアが3回、性別不明が14回、3頭は成獣2頭と仔の2回であった。日あたり最大出現数は4月20日の8頭であった。

【行動など】

カモシカは基本的に単独で見られた。母親と仔と思われる個体が一緒に見られたのが数回あったが、3月になると親仔でいることはあまり見られなくなった。親仔が見られたのは、小岩周辺とその上部に集中しこれが同一親仔か別の親仔かは明らかでない。他にはハイ谷斜面に1組、尾添川上流と下流の遠方に1組ずつ見られた。雌雄のペアの場合、雄は雌に近づき臭いを嗅ぐ様子や、前脚で雌を蹴るキッキングが12月5日、12月14日、12月26日に見られ、12月14日には交尾も確認された。3月23日には、性別不明の1頭がもう1頭を激しく追いかけていたことがあった。2頭が接近して互いに存在に気づくことは、よく見られたが、激しい威嚇、追い払いはこの1回だけだった。カモシカは、積雪期は樹木の枝が積雪上でている尾根上にいることが多く、枝のない場所に長時間滞在することは少なかった。しかし、4月になり雪の溶けた場所が増えてくると、芽吹いた草を食べに草地に現れる個体数が増加した。

カモシカの個体識別も試みたが、確実に識別することは、角の欠損した個体などを除いて困難であった。右角が折れて短くなった個体(右短・うーたん)は3月27日に初めて観察されてから、閉館日までにオオノマからズバイ壁の間の斜面中腹で16回出現しており、その範囲は2ha程であった。

イノシシ

【出現状況】(図4)

イノシシが観察できたのは128日で、観察された回数は266回、延べ頭数は811頭で、内訳は単独が115回、2頭が30回、3頭が51回、4頭が40回、5頭が14回、6頭が9回、7頭が4回、8頭が2回、9頭が1回であった。日あたり最大出現数は1月5日と22日の12頭であった。

【行動など】

母仔と思われる小群で見られることが多いが、積雪が多くなると群れを構成する数が多くなる傾向がみられた。小群は母親と思われる成獣1頭と仔が数頭であることが多かったが、仔の大きさは不揃いであり、仔がある程度成長しても母親と一緒に行動することがうかがえた。群れが大きくなると雌と思われる成獣が2頭以上になることもあった。積雪期のイノシシは、成獣が雪をラッセルし仔が連なって後に続いて移動していた。また、イノシシは山腹斜面の雪崩や落雪で土がでている場所に集まっていることが多かった。今シーズンの観察舎での最深積雪が350cmであったが、ブナオ山斜面の土が出ている場所では、イノシシが土を掘り返し、ススキやクズと思われる根などを食べているのが観察された。イノシシは雪崩や落雪が起こる急斜面にすることが多いため、雪崩に巻き込まれることもあり、2月16日にはオオノマで発生した雪崩にイノシシの若い個体3頭が巻き込まれて流されたが、3頭とも脱出した。この様子はSNSのXでも公開されている。一方1月26日には、オオノマの雪崩跡にイノシシの死体1体が埋もれているのも発見された。イノシシは積雪の多い当地では、雪の落ちた危険な場所に依存して生活するが、事故も多いことがうかがえた。イノシシの出現数が2月から減少気味なのは、雪崩などで死亡しているのも原因になっているのかもしれない。イノシシは深い積雪の中をラッセルする様子や、雪崩跡の凍結した急斜面を直登しているのも観察でき、雪が多い中でも活動できることがうかがえた。

ニホンジカ**【出現状況】(図5)**

シカが観察できたのは43日で、観察された回数は50回、延べ頭数は81頭で、その内訳は単独が30回、2頭が12回、3頭が6回、4頭と5頭が1回であった。観察できた延べ頭数は85頭で、雄は57頭、雌は6頭、性別不明は14頭、若齢個体が4頭であり、雄の角の4尖は38頭、3尖は3頭、2尖は1頭、1尖は10頭、落角は2頭、袋角は3頭であり、雄成獣が多く雌が非常に少なかった。日あたり最大出現

数は11月25日と4月18日の5頭であった。

【行動など】

シカは初冬積雪が20cm以上になる12月10日ごろから170cm以下になる4月前まで観察されなかった。シカは積雪期になると高いところから降りてきて越冬集団を形成すると言われており(高槻, 2010)、ブナオ山では初冬には雪の少ない低地に移動し、春にはまた戻ってきているのかもしれない。

ツキノワグマ**【出現状況】(図6)**

クマが観察できたのは35日で、観察された回数は182回、延べ頭数は184頭で、その内訳は単独が179回、2頭が1回、3頭が2回であった。2頭、3頭はいずれも親と1歳仔が1頭もしくは2頭であり、当歳仔は見られなかった。日あたり最大出現数は4月28日の12頭であった。

【行動など】

2024年の最後にクマが見られたのは12月3日で、2025年の最初に見られたのは3月10日だった。4月になると見られる数も増え、多数のクマが単独で見られ、アザミ類の葉やシシウドの茎、イタドリの葉、ニリンソウ、カタクリなどを食べるのが観察された。4月28日には12頭見ることができ、当地が雪解けで高茎草本が伸び出す頃に多くのクマがこれを食べるために集まってきているものと思われた。ブナが開花すると木に登ってこれを食べるクマが見られるが、今年はブナの開花がほとんど無く、木に登っているのは数回しかなかった。また、クマは草を食べたあと、根曲がりした木の上で休む姿がしばしば見られた。さらに、春の気温が上がった日には、消え残った雪の上に寝て身体を冷やしていた。

ニホンザル**【出現状況】(図7)**

サルが観察できたのは103日で、観察された回数は146回、延べ頭数は1134頭であった。一つの群れと思われる最大値は1月14日に36頭であった。サルは広い範囲に散らばって移動するため、出現頭数を把握するのは困難であった。ブナオ山斜面の他、

ハライ谷や観察舎周辺に出現したこともあり、最大値はハライ谷で16頭、観察舎周辺で7頭であった。

【行動など】

積雪期には木の枝の上で樹皮や冬芽を嚙ったり、土の出ている所で餌を探す姿が見られた。移動は極めてゆっくりだった。

引用文献

高槻成紀(2010) シカの生態誌. 155pp, 東京大学出版会, 東京.

イヌワシ

【出現状況】(図8)

イヌワシが観察できたのは33日で、延べ出現羽数は61羽で、その内訳は単独が20回、2羽が16回、3羽が3回であった。2羽の場合多くは成鳥と思われたが、3月9日と10日には若鳥と成鳥であった。3羽の場合の多くは成鳥2羽と若鳥であったが、2月25日には成鳥2羽に別の成鳥1羽が近寄った。出現時間は、9時台はなく、15時台も少なく、12時から13時台が約半数を占めていた(図9)。

クマタカ

【出現状況】(図10)

クマタカが観察できたのは76日で、延べ出現羽数は133羽で、その内訳は単独が69回、2羽が20回、3羽が8回であった。1月26日から31日までの間、オオノマ中腹の雪崩跡にあったイノシシと思われる死体を2羽で採食しており、2羽が争うこともあった。出現時間は9時台と15時台は少なく、12時から13時台が約半数を占めていた(図11)。

まとめ

ブナオ山観察舎からの観察地は積雪が多く、カモシカは尾根部の木本の枝先を食べ、サルは木の上や雪が落ちて土の出ている場所で、イノシシは土の出ている場所で餌を探していることが多かった。また、積雪期にクマは冬ごもりし、シカは移動しており、雪解けにより斜面に草が展葉すると多くの動物がこれを食べに集まっていた。

